講演

南京戦を報じた記者たち

上丸洋一　朝日新聞編集委員

●はじめに

朝日新聞の編集委員をしている上丸と申します。最初にこの会で話をしてくれませんかと依頼を受けたときに、私は多くのことを知っているわけではない、むしろ皆さんから教えていただくことの方が多いにちがいない、と躊躇しました。まして、先ほどのような映画の後で、しかも直接の証言を体験者からうかがった後で、何をお話しするのか。

ただ、南京戦を取材していた記者たちは戦場でどうしていたのか、どういう状況で、何をしていたのか、ということは必ずしもよくわかっていない。だから、私が多少調べたことをみなさんにお話しするのも少しは意味があるかもしれない。そんなふうに自らを励ましております。

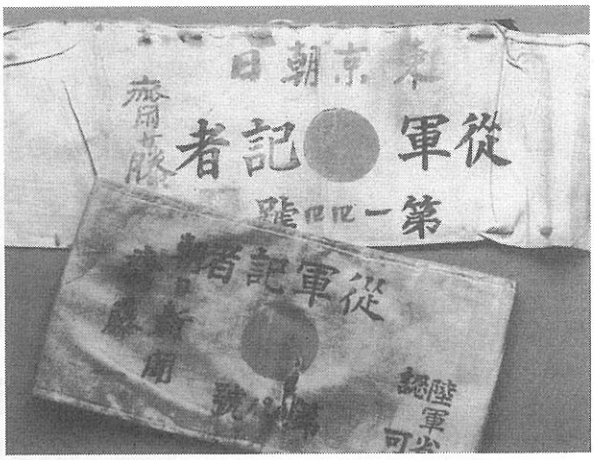
●連載「新聞と戦争」

ちょうど去年の今頃（２００７年１２月）ですが、「新聞と戦争」という朝日新聞の年間企画の中で、「南京」シリーズ全１５回を執筆しました。

実は「新聞と戦争」の中で「南京」を取り上げるかどうか、最初からはっきり決まっていたわけではありません。このテーマはよほどがっちりやらないといけない、「南京虐殺はなかった」などと言って、朝日新聞を批判したい人がいっぱいいるわけですから、よほど慎重にやらないといけない、お手軽にできることではない、と思っておりました。

しかしそれでもやろうということになった理由は、ひとつには南京戦に従軍した斎藤一（さいとう・はじめ）という朝日新聞記者の手書き原稿（以下、手記とする）をたまたま神田神保町の古本屋で見つけたことがあります。彼は、上海から南京攻略軍のあとを追って南京まで行きます。そして南京入場式前日の１９３７年１２月１６日、戦場で死んだ同僚カメラマンの遺骨をもって南京を離れます。斎藤の手記は日記のように日を追って書いたものではなくて、あとで、どこかで書いたものです。あとで、といっても、日本に帰ってからではなく、戦地で書いたもののようです。

連載をまとめた単行本『新聞と戦争』（朝日新聞出版、２００８年）の裏表紙にあるのが、斎藤一が身につけていた腕章の写真です。ごらんになるとわかるように、現物はまさに血のにおいの漂うような、非常に生々しく、迫力のあるものです。その斎藤記者の子息もまた朝日の記者をしています。そういう資料を見つけて、これを生かさない手はないということで、連載で「南京」を取り上げることにしました。ただし、紙幅の都合上、記事には、斎藤の手記のごく一部しか使うことができませんでした。



●上丸大吉の手紙

それから、これは個人的なことなのですが、私の親戚にあたる上丸大吉という人物が南京戦に参加していたことが４年前にわかりました。彼は岐阜県の高山の人で、郷里に送ってきた手紙が私の家に残っていたのです。（現物を示しながら）ここに「１２月１７日南京陥落記念」とはんこが押してあります。上海戦で戦争は終わりだと思っていたところ、あれあれと思っているうちに南京に行くことになって驚いている、そういう趣旨のことが書かれています。ただ、戦場で何を見たかは書いていません。山砲兵だったということですから、軍の先頭を切って前進したのではなくて、後ろの方からついて行ったのでしょう。それでも１３日に南京に入城したと書いていますから、何かを見ているだろうと思います。

親戚に南京戦に参加した人物のいたことがわかって、自分にとって南京戦は、以前のような他人事ではなくなりました。今日、南京虐殺はなかった、というように、歴史を改竄しようとする人たちがいます。「南京戦は、他人事ではない」と思っていたところに「新聞と戦争」の企画が持ち上がり、斎藤一の手記が見つかった。それで、ではやろうと決断したわけです。攻撃を受けるかもしれないといって避けて通るのも、逃げるようで嫌でした。

とはいえ、迂闊には書けない。兵士の従軍日記などに対して、虐殺否定論者はしばしば、「それは偽物だ」といった攻撃をかけてきます。だから、手堅い資料だけを使いたい。幸い、陸軍の将校の親睦団体である偕行社が８９年と９３年に、南京戦に関する資料集を出しています。この資料集を主として使うことにしました。そのほかにもたくさんの文献や日記などを参照しながら、その中から記者たちの行動をあぶり出すという作業に取り組みました。「論より証拠」です。記者たちはどういう状況にあったのか、事実それ自体に語らせよう。そう考えて資料の山と格闘しました。

●残された疑問

連載「新聞と戦争」はすでに単行本になっていますが、「新聞と戦争」というテーマは、なお未完だと私は思っています。つまり一冊の本ができたからおしまいというわけではない。やり残した問題はたくさんあるし、「新聞と戦争」の関係は、常に問い返されなければならないと思っています。

連載を終えて浮かんだ疑問の一つは、南京戦に従軍した記者たちは、戦後において、なぜ沈黙したのかということです。戦中は検閲などあって書けなかったかもしれない。しかし、戦後は書けたはずです。記者なら自分の見たもの、聞いたことを書き残せばいいのに。ところが、みなさんご存じのように、南京戦の実態について、記者たちはほとんど書き残していない。記者たちがちゃんと証言を残していれば、今日、歴史改竄論者がこうまで跋扈（ばっこ）することもなかったのではないか。なぜあなた方は沈黙したのか。そういう疑問があるわけです。

●軍と記者との関係

南京虐殺を語る重要な資料の一つに、山田栴二（歩兵第１０３旅団長）という人の日記があります。彼の日記の１９３７年１２月２４日の項に次の記述があります。南京攻略から１１日後です。

「終日滞在、十日以来の日誌を整理す、新年の『東日』に出す色紙を書かされたり、『尽忠報国』と書く」

東日は東京日日新聞。毎日新聞の前身です。ここに書かれている状況は、目に浮かぶようです。「山田さん、頼むよ、ちょっと色紙一枚、書いてよ」という感じですね。正月紙面用にちょっと書いてよ、載せるからという、そういう関係です。

翌２５日には、こう書いています。

「夜、『朝日』記者横田省巳氏の凱旋を送る別宴を開く」

つまり日本に帰る朝日記者のために送別会をやっているわけです。

軍人と記者は、ある種、同志的なつながりの中にある。と言うと、美しすぎる。ある種、侵略の共犯者として存在するわけです。ジャーナリズムと軍隊は南京を攻略するうえで、役割の違いこそあれ、

共に認め合い、共に行動する存在であったということです。

日本新聞協会は３７年１２月に、南京攻略戦を指揮した陸軍の松井石根大将に祝電を出しています。南京を攻略したあと、日本新聞協会は、「皇軍ならびに従軍記者、慰問使派遣」のための打ち合わせしている。そして慰問の特使を戦地に出している。朝日の幹部も前線に行って松井大将を慰問している。そういう記事がしばしば新聞に出てきます。

また、東京日日の論説委員だった丸山幹治（政治学者・丸山真男の父）は、日露戦争と日中戦争とで記者の活動はどう違うか、といった点について、雑誌「改造」３７年１２月号に寄稿した「従軍記者論」と題する論文で、こう書いています。

「昔の（日露戦争時の）新聞は戦時でもノンビリしたもので、かなり自由が利いた。差止命令は頻々と出たし、やかましい取締もあつたが、新聞社は馬鹿正直にそれを守るに及ばないと思つてゐた。違反して叱られるのが当り前だつた。新聞社は当局を恐れるよりも読者を恐れた。読者の愛国的情熱の中に新聞は捲き込まれたといつてもよい。内村鑑三、幸徳秋水、堺枯川の三人が万朝報を去つたのは、その非戦論が当局に睨まれたからでなく、読者に反対されたのである」「現代の新聞はさうは行かぬ。……特派員や従軍記者も、いはば昔のやうなフリーランス的な呑気なものでなくなつたのである」

日露戦争のときはのんびりしたもので、厳しい取り締まりもあったけれど、新聞社は真正直に守るに及ばないと思っていた、違反してしかられるのは当たり前だったというのです。ところが日中戦争ではそうはいかなくなった、新聞記者も昔のようにフリーランス的なのんきなものではなくなった、と書いています。南京戦当時の新聞と軍隊は、そういう関係にあった。その事実をまず押さえておく必要があります。

●誤報競争

資料を調べていてわかったのですが、軍の幹部は、新聞を読みながら進軍しています。日本の新聞が前線に届いているんです。これには驚きました。

上海派遣軍参謀副長の上村利道の日記にこう書かれています。南京攻略目前の３７年１２月１０日の項です。

「大した業務もなく内地新聞の残りを耽読す。南京（占領）祝賀の準備に大童なり」

日本において祝賀の準備に取りかかっているという新聞記事を、南京陥落の三日前に現地で読んでいた。

次は、戦車部隊を指揮した藤田実彦の『戦車戦記』という本があります。そこに新聞記者の姿が出

てきます。

「後方連絡機関をもたない記者諸君は朝からめしもたべていないというので、ぶんどりの支那米で給養してやった。自分たちも上海を出てからきょうまで、まだ一度も後方から補給をうけていない。米一粒、ガソリン一滴、梅干し一個も貰っていない。みな支那軍が残してくれたものを使用してきたのである。……飯をたべおわると新聞記者諸君はひとり減りふたり減りして十二時ごろ皆どこかへ行ってしまった」

同じ釜の飯というか、同じ略奪した飯を食っていたということです。

南京戦を取材した朝日新聞の記者は、移動手段として主にバスを使っています。上海近郊で戦争をやっている時は、上海市街の宿舎から前線に通って取材にあたった。昼間移動すると危ないというので、朝暗いうちに前線近くに行って取材し、伝書鳩を使って原稿を上海に送るのです。それで夜暗くなった後に帰って来る。ときどき帰ってこなかったりして心配かけるのですが、通いで戦場に行って取材していました。通いでなくなるのはもちろん、軍が南京に向けて移動し始めてからです。

南京への移動では、朝日新聞は新兵器のバスを使って軍について行った。それを同業他社がうらやんだ、といったことが当時の資料に書かれています。

そのように、軍の後方をついて行ったということです。

上海から南京までの間は、誤報の連続です。どういう誤報かというと、ある都市を、まだ占領していないのに占領したと書いてしまうわけです。新聞各社が競争して、早い者勝ちのように「〇〇陥落」と書いてしまう。

なぜかというと、新聞記者は軍の後方にいますから、前線のようすは直接見えない。直接見えなくても、新聞記者はよそより先に書きたい。そういう気持ちは昔も今もそう変わらない。だから、実際には陥落していないのに、当て推量で「陥落した」と書いてしまう。

南京戦当時、上海派遣軍報道部員だった馬淵逸雄は著書『報道戦線』の中で、こんな場面を描いています。

「各部隊に配属せられた記者達は、自分の附いて居る部隊に何とか手柄を立てさせて、それを報道しようとあせつて来た。それについてこんな挿話もある。某部隊の幕僚が『もうあの〇〇鎮は取れさうなものだ』とつぶやいた所、側に居た従軍記者が『よろしい、もう占領して仕舞ひませう』と言つて、〇〇鎮占領の電報を打った」

そういう具合に、前へ前へ、南京へと進軍していくのです。たとえば３７年１１月２２日に、同盟通信が、無錫（むしゃく）という都市を占領したと打電します。ところが、実際には、無錫への攻撃が始まったのが２３日です。攻撃が始まってもいないのに、占領したという記事を配信した。本当に

占領したのは２５日です。

朝日は、同盟電を受けて、無錫を占領したと書いてしまう。本当に占領したときには、また占領したとも書けないものだから、無錫を「奪取」したと書いています。それも、小さく書いています。「占領」というときに派手にやっていますから、もう一度、占領とは書けない。だから「奪取」と書いてごまかした。

先ほどの馬淵の著書によると、南京陥落もどこかがフライングをおかした。

「(12月9日)午後からは猛烈な砲撃戦となり、ことに夕方ごろ、第一線の銃砲声は凄惨以上で、夜七、八時ごろになっても敵のうちだす弾丸の音はやまなかった。夜九時ごろだった。同盟の大鋸(おおが)君がやってきて、『東京からのニュースに、南京は本夕陥落したといってましたよ』と、いかにもがっかりしたように両手で頭をかかえてあおむけに寝台にのびてしまった。……ほかの部屋にいた下士官たちもつぎつぎに、『それはほんとうですか』とききにきた。部下ばかりではない、なんとかして南京陥落瞬時の戦況を、南京一番乗りの部隊の活躍ぶりを、いちはやく報道して報道戦士としての勝ち名乗りをあげんとしていた新聞、通信記者諸君も全くがっかりしたらしい。つぎつぎに自分のところに尋ねてきて、『南京はもうおちたそうじゃないですか。なんのためにいままで苦労してきたのかわからないようなものですね』と、南京一番乗り部隊としてあてこんでついてきたのに、その山がはずれてしまったんじゃないかといわんばかりに、まるで自分の部隊の責任みたいにいう」

１２月９日の段階で、東京から南京陥落のニュースが上海に伝わってくる。実際に南京が陥落するのは１２月１３日ですが、新聞は１２月１１日の段階で「陥落」を報じます。それで全国各地で提灯行列が始まってしまう。現実よりニュースが先行したうえ、それを聞いた天皇が、ご機嫌斜めならずだった、と新聞が書いた。これを聞いた上海派遣軍報道部員の馬淵逸雄は「両三日中に南京の完全占領でも出来なければ……自決の外無しと覚悟を極め」ます。

こういう新聞のありようを文芸春秋が批判します。文芸春秋３８年１月号の「新聞匿名月評」欄に「南京へ！南京へ！」という記事が載ります。そこにこう書かれています。

「従軍記者はやけに『一番乗り』をやり、やけに日章旗を立てたがる。無論ニュースは迅速を生命とするが、徒らに速からんとするヨタ電は一利百害だ。上海戦線でも、大場鎮に、南翔に幾度か日の丸の旗が翻へりしぞ。そしてさんざヨタつた揚句、戦争ジャーナリズムは遂に『完全に占領』といふ術語を発明した。皇軍の威信を傷ける報道ぶりだ」

●西条八十のこと

今回の取材の中でわかったことの一つは、西条八十という詩人、作詞家が、当時、非常に含みのあ

る詩を書いていたことです。西条は当時４５歳、今はヤクルトスワローズの応援歌として知られる「東京音頭」が大ヒットして、すでに大家でした。

その西条が、雑誌「主婦の友」と読売新聞に派遣されたらしく、３７年１２月１７日、つまり入場式の日に南京に入っています。そのときの模様をつづった「皇軍奮戦の跡を弔ふ」と題する文章が「主婦の友」３８年２月号に掲載されている。西条の全集を見ると、「初出未詳」とありますが、今回それが「主婦の友」３８年２月号であることがわかりました。これまで南京戦について書かれた本はたくさんありますが、この西条の文章にふれたものは、私は見ていません。

その中で彼は南京城内のもようや入城式について書いています。

「大通りは、大体浄められてゐるが、横町には支那兵や軍馬の屍体がいつぱいだ」

「馬の屍体が横はつてゐる。皮が剥がれてゐる。お臀が半分ぐらい切り取られてゐる。飢ゑた籠城の支那兵どもが喰べたのだらうか」

「南京入場式。〇〇の陸海軍の精鋭が、歓喜に頬を赤くほてらせながら、粛々中山門から入つて、国民政府の門前まで蜿蜒長蛇の列を見せたときだ。／その列の末尾に、カーキー色の軍服めいた服装をした、新聞記者の一団。言ひ合せたやうに白い布で包んだ箱を背負つて進んでくる。事変髭がボウボウとのびて、みんな栄養不良の蒼い顔だ。『その背負つてるものは何ですか？』路傍(みちばた)に立つて、行進を送迎してゐたわたしが、一人に訊いてみた。『同僚の遺骨です。可哀さうに第一線で戦死した友だちの骨に、せめて今日の南京入城の盛観を見せてやるんです。ごらんなさい。「朝日」の浜野(嘉夫)の骨も、みんな仲間が背負つてゐます』」

文中、「南京入場式」とあるのは「南京入城式」の誤りです。原文の誤りです。浜野嘉夫は、南京への途上、中国軍の攻撃にあって死亡した朝日のカメラマンです。

注目しなくてはならないのは、入城式で「新聞記者の一団」が行進していることです。南京戦において、記者たちは戦争を客観的に見て報道する立場になかった。軍隊の末尾について行進していた。記者の立場を端的に語る事実です。

それから「八卦洲」。これは揚子江の中洲です。揚子江岸の港、下関（シャーカン）あたりから脱出を計った人々が、その中洲に逃げのびる。それを日本軍が追いかけて行って虐殺した。多分その一端だと思いますが、西条八十は「南京の入場式を見ての帰途、便乗した水雷艇〇〇」から「南京から筏で逃げてきた残兵を」を銃撃する現場を見ています。以下、引用です。

パン、パン、パン……ともの凄い機関銃の音がした。

わたしは士官次室(ガン・ルーム)のストーヴの前で、うとうと居眠りしてゐたのだが、びつくりして目を覚ました。

「先生、面白いです。はやく甲板へ」

年若い戎兵(じゅうへい)が呶鳴つた。

飛び出すと、艦橋の機銃が吼えてゐる。また、パン、パン、パン……

夕ぐれ五時、南京を出て間もない、右舷近くに見える八卦州といふ所だ。灰褐色に枯蘆に覆はれた所。そのうへに砲煙がうねうねと渦巻いてゐる。

「南京から筏で遁げて来た残兵が約〇〇あそこにゐるんです。御覧なさい」

そばの少尉殿が眼鏡を貸してくれた。

なるほど、居る、居る。枯芒の丘の前後に、真黒く蠢々(うようよ)とかたまつてゐる。

「奴等、向岸へ一刻も早く渡りたがつてゐるんです。ほら、ジャンクに乗つてるでせう」

なるほど、正規兵の軍服を着たのが、ジャンクに乗つてまごまごしてゐる。(あとで地図を見ると向岸は、まだ日本軍の手の届かない浦子口鎮だの、遠くは六合の町など在る江蘇省の一部だ。)

そのうち、また吼えた機銃の煙が、ちやうどジャンクのうへで炸裂した。うへの黒い人群は一瞬にしてへたばつてしまつた。

「あそこには食べ物があるんでせうか」

「多少人家が在る筈です。だが、〇〇もの人間が上陸(あが)つたら、もう何もないんでせう」

「ぢや、結局餓死(うえじに)ですね」

「さう餓鬼地獄のやうな光景をやつてるでせう。——時々まだ発砲したりするので、近々陸軍が上陸して掃蕩をやる筈です」

これは艇長の話だつた。

機銃は声を収めた。長江の黄昏、来しかたの南京の空は、美しい夕焼だ。今日入城の歓喜に酔つた将士たち、——あの荒寥たる廃墟の中で、どんな祝杯をあげてゐるのだらう。

以上が引用です。南京虐殺は、当時、報道されなかったとしばしば言われますが、必ずしもそうではなかった。現に、このように書かれていました。

●無智残虐の軍閥

西条八十はそれから南京で何日かを過ごし、その後上海あたりを回るのですが、そこで書いた詩を引用します。この詩は「皇軍奮戦の跡を弔ふ」の中に登場します。あまり目にふれる機会がないと思いますので、全文、引用します。

さらば上海

夢魔の都をさまよひて、
見るべからざるものを見ぬ、
十日の旅の血地獄に

身も魂も疲れたり。

年の瀬せまるクリスマス、
共同租界の百貨店、
燈火(ともしび)明(あか)く照り彩(は)えて
サンタ・クロスは踊れども、

窓の下には避難民、
見るも冷たき石道に
相抱(いだ)きつつ、幾百ぞ
死人のごとく眠るなり。

幾万千の屍を
底に沈めし長江ぞ、
夜のジャンクの舷(ふなべり)に
青き燐火は燃ゆるなり。

英人宿の煖房に
身は安らかに眠れども
血みどろの手の幻は
夜毎にわれを叫ばしむ。

日本(ひのもと)といふよき国に
生れし幸を身に知りて
母を慕へる児のごとく
急がんとするこころかな。

長崎丸の甲板に
白痴のごとく佇みて、
「さらば」も言はず去りてゆく
われを咎めそ、上海よ

無智残虐の軍閥を
呪ふ想ひは、舌の根を

かたく塞ぎて、旅人は
ただ涙のみ流すなり。

希(こいねがわ)くば皇軍の
正義の楯よ、愛の手よ、
一日(ひとひ)も早く薔薇いろの
和平をここに投げよかし。

われは去りゆく、復活の
光を浴びて嬉々として
かれらが踊る海港(かいこう)の
未来を瞼(まぶた)に描きつつ。

われは去りゆく、曇りなき
大日本の日章旗、
この大陸を、慈父のごと
抱かん日をば信じつつ。

以上が引用です。当時、こういう詩がよく雑誌に載ったものだと思います。

詩の中の「無知残虐の軍閥」とは表向き、蒋介石を表すのでしょうが、実は日本の軍閥のことを言ったのではないか、と想像します。

希（こいねがわく）くば皇軍の
正義の楯よ、愛の手よ、
一日（ひとひ）も早く薔薇色の
和平をここに投げよかし。

これは「皇軍」に対する嫌みというか、皮肉というか、反語というか、そういう表現ではないかと思います。つまり彼は「南京」を見た。見たからこう書いた。

西条は内心、中国となぜ戦争をするのか、この戦争に正義はないじゃないか、と思っていたのではないか。それが、私の印象です。

西条八十の評伝はいくつかありますが、この詩にはほとんど、ふれていません。近年、筒井清忠という学者が西条の評伝を書いています。上記の「さらば上海」も引用されていますが、ごく一部を引用しているだけです。今回、これを全部読めるのは結構貴重なことです。

西条はこの文章の中で、今度の旅で得た貴重な詩材をこなしきるには貧しい才分しかもたぬ私には今後何年かの歳月を要するであろう、というようなことを書いています。しかし、戦後、西条は「青い山脈」の歌詞は書きましたが、南京については書かなかったのではないかと思います。戦後になって「南京」の意味を問い直すことはなかったのではないか。西条の仕事を全部調べたわけではありませんが、そんな気がします。

●集合の死　個別の死

漫談家の井口静波という人物が、講談社に派遣されて、従軍記者として上海から南京に行ってます。その記事が「少女倶楽部」３８年３月号に「陥落直後の南京をおとづれて」という題で出ています。なかに次の一節があります。

「翌朝、いよいよ南京の北西にあたる下関（シャーカン）に着きました。あたりには敵兵の死体が重なり合つてころがつてゐて、まだ戦争の跡なまなましいものがありました。私たちは敵兵の死体を踏み越えて、敗残兵を掃蕩してゐる日本の兵隊さんたちの姿を心強く感じながらも、危険な道を避け避け、南京市中央にある国民政府に辿りつきました」

中国人の死体が重なり合っているという光景は、これに限らず、新聞も報じています。当時の読者は、こうした記述をどう受け止めたのか。作家安岡章太郎は著書『僕の昭和史』の中で、こう書いています。

「いまになって思うのだが、もしこれをあの当時、日本の新聞やラジオでこのとおりに報道されていたとしても、果して僕らはそれを信じる気になったかどうか、僕には自信がない。たしかに僕らは、南京虐殺事件というものについては知らされていなかったし、細かい数字や何かは無論、全然知らなかった。しかし、十五万五千人というような数字を聞かされても、それだけでは何も驚かなかったのではないか。すくなくとも、それだけの数の死体が街に転がっているということがどういうことなのか、自分の眼でそれを見てみるまで、何のことだか検討もつかなかったに違いない。――要するに、チャンコロが死んでいる、ただそう思っただけだったかもしれないのだ。だいいち僕自身は、その頃、日本人の将校が二人で中国人の『百人斬り競争』をやったという新聞記事が出ていたことを、全然憶えていないのである。……僕の家では、新聞は朝日と(東京)日日をとっていたが、日本の将校がシナ人の首をいくつ切ろうが、そんなことには少しも興味がもてなかったからであろう。この僕の無関心は当時の新聞に軍部の検閲が加えられていたということとは直接関係のないことだ」

これはもちろん戦後に書かれたものです。

日中戦争当時、地方紙や全国紙の地方版は、戦場の手柄話として、日本軍が多数の中国人を殺した、

と書いています。しかし、当時の記者、あるいは読者は、それを、それぞれに名前を持つ人間の死とは思っていなかった。それが安岡章太郎の回想の意味です。

当時の新聞記事にも、断片的にですが、死体の山があったとか、犬が死体を食っているとか、そういう戦場の光景が出てきます。だから新聞や雑誌は、戦場の事実を全く書かなかったわけではなかった。しかし、その光景の意味するところをまっすぐに受け止めることができなかった。中国人の死は、「中国人」あるいは「敵」という集合名詞の死であって、一人ひとりの個別の死ではなかった。

●記者たちの沈黙

南京戦には、大勢の記者が従軍しています。朝日だけでも南京陥落までに、百数十人が行っている。新聞記者だけではありません。「連絡員」と呼ばれた人たちも戦場に行っています。原稿やフィルムを後方に運んだりする取材活動のサポーターです。新聞の販売店員を、連絡員として派遣しています。新聞販売店の元気で丈夫そうな人を訓練して、戦場に送り込んだ。

そういう連絡員も戦場で死ぬ場合があります。その場合には、紙面で大きく顕彰します。１９４２年の芥川賞受賞作は「連絡員」という作品です。書いたのは当時、朝日記者だった倉光俊夫という人です。ところが「連絡員」の実態については、記者以上に、わかっていません。これからの課題の一つです。

問題は、それほど多くの記者が南京戦に従軍したにもかかわらず、なぜ彼らは、その記録を書かなかったのかということです。

記者が日々、日記をつけなかった気持ちは私にもわかります。職業上の文章、つまり記事を書くだけで疲れてしまって、日記を書く気にならなかったのでしょう。

それから、先ほど申し上げたように、軍と新聞記者との関係は、共犯的な関係にあった。記者たちは軍の行動を客体として観察するまなざしを持っていなかった。このことが戦後になって南京虐殺を語る記者があまり現れなかった、あるいは沈黙を守ったことにつながっているのだと思われます。

この戦争は正しい、正しいから戦争をやるのだと記者たちはおそらく思いなしていた。無理矢理そう思ったのではなくて、ほとんど疑問の余地なく、そう信じていた。

入城式の末尾を兵隊について行進してしまった記者たちにとって、この戦争はわれらの戦争だった。彼らはおそらく、日本兵の非道を毎日のように見ていたに違いないけれど、それを客体として書く勇気をもてなかった。自分も、刀こそふるわなかったものの、「日本」の一員だった。「日本」の一員だった者が、日本軍の非を書けない。

戦後、１９６６年に『南京作戦の真相』という本が出ます。書いたのは、南京戦に毎日記者として従軍した五島広作です。この本は「南京虐殺は世界史のウソ」と主張しています。この手の本の走りの一つだと思われます。

南京戦当時、朝日の南京支局長だった橋本登美三郎の署名記事が37年12月16日付の東京朝日夕刊に載っています。その中で橋本はこう書いています。

「わが軍が捕虜とし又は殲滅した兵数は六万を下らぬと推察されて居る」

橋本も何かを見たことでしょう。ところが、橋本は後年、日経新聞の「私の履歴書」ではこう述べています。

「昭和十一年から十五年までの南京・上海時代の出来事を一つ一つ書いたらきりがないので、ここではのんびりした個人的な話にとどめておこう」

そう言って逃げている。新聞記者の中には、捕虜や市民の虐殺場面を本当に見なかった人もいたと思います。それは、ひとえに、いつ、どこにいたかの問題ですから、その場にいなければ目撃はできない。しかし、見なかったという証言を１００人集めても、なかったことの証明にはなりません。死体の山に背を向けていた人が、死体はなかったと言っても、死体の不在証明にはなりません。

木村伊兵衛という有名な写真家がいます。彼は南京入城式の写真を撮っています。「改造」３８年３月号に、木村の写真が掲載されています。しかし、戦後、木村はその経験を語っていないと思います。

評論家、ジャーナリストとして知られる大宅壮一も南京で仕事をしています。彼も戦後、南京について何も書いていないのではなでしょうか。

当時の記者で、何人かは体験を書いていますが、そういう人は非常に少ない。

●素朴なナショナリズムの前で

以上、まとめますと、南京戦は当時、まったく報じられなかった、と言われますが、実際には、新聞の地方版や雑誌に、断片的ながらしばしば戦場の模様が描写されています。同時に、現地に入った大勢の従軍記者など、もっと証言していいはずの人々が黙っている。そういう構図が浮かび上がります。

記者たちはなぜ、証言をほとんど残さなかったのか。それは、軍と行動をともにし、精神的にも軍とともにあった記者たちは、軍を客体として、対象として見ることができなかった、ということだと思います。言い換えると、記者たちは、軍すなわち国家の外に立つことができなかった。戦争遂行のいわば共犯者であった記者たちは、自分だけその外に立って、軍の行為を非難、批判することはできないと考えたのではないか。南京戦での軍の行動を書けば、それはそのまま軍に対する非難、批判となります。だから記者たちは、戦後になっても、自らの体験を書こうとしなかった。それは天につばすることだったからです。そんな光景を目の当たりにしながら、あなたは何をしていたのか。それに答える言葉を記者たちは持っていなかった。

作家の石川達三は、南京陥落の直後、南京戦に参加した兵士に取材して「生きてゐる兵隊」を書きます。石川自身は南京戦を直接見なかった。だからこそ石川は南京戦を対象化して小説に書けたのか

もしれません。石川にとって南京戦は自分の外で起きた出来事だった。一方、従軍記者たちにとって南京戦は、自分自身の出来事でした。

戦争をしている国家の外に立って、戦争を批判することはそうたやすいことではありません。しかも、その困難は決して過去のものではありません。イラク戦争が始まったとき、言論の自由が１００％保障されているアメリカの議会において、攻撃に反対した議員はたった一人でした。国家はいつのときも「これは正義の戦争である」と言います（あの日中戦争やイラク戦争でさえ！）。言論の自由があっても、世の中が戦争へとなだれ込んでいくときに、戦争に反対することがいかに難しいか。つまり、ナショナリズムの嵐が吹き荒れる前で「それは違う」と言うことの困難です。

その難しさを、あなどらない方がいい。反戦平和への強い信念さえあれば、主張を貫けるはずだ、と私も思います。第一義的にはそう思うし、そう思いたい。思いたいけれども、一方で、そう簡単に考えない方がいいとも思うのです。素朴なナショナリズム、素朴な「ニッポン、頑張れ！」に抗することがいかに困難か、それは近年の君が代訴訟などを見ても明らかではないでしょうか。

新聞が戦争を支えた時代がかつてありました。私たちは、そういう歴史を二度と繰り返さないために、「新聞と戦争」という連載に取り組みました。しかし、それは口で言うほどやさしいことではない。そういう認識を持つことが必要なのではないか。

戦争協力に励んだ記者たちは、私たちと地続きのところにいる。彼らが劣っていて、私たちが優れているわけではない。同じ地平に立っている。その自覚に立って、なお同じ過ちを繰り返さないためにはどうすればいいのか。

ここまで南京戦について調べたことを述べました。調査はなお未完であり、南京戦とジャーナリズムの関係をもっともっと調べたいと思っています。お気付きのことがございましたら、ご教示いただけたら幸いです。

ひとつ、ついでに申し上げますと、朝日新聞に保存されている写真を見ていて、あれっと思ったことがあります。３９年２月２５日に南京で捕虜慰霊祭を行っている光景が撮った写真です。南京攻略の１年２カ月後に南京で捕虜慰霊祭をやっているのです。それは当然、捕虜が死んでいるからです。いろいろな本を見ても、この慰霊祭がどういうものなのかよくわからない。今のところ謎です。これについても何かご存じの方がいらっしゃればぜひ、ご教示ください。

拙い話で失礼しました。ありがとうございました。

まとめ

田中　宏

ノーモア南京の会代表

「ノーモア南京の会」の代表の田中です。１２月１３日は、「南京陥落の日」ということになっています。「南京６０ヵ年全国連絡会」があって、各地で集会を持っています。東京はいつも最後になるのですが、毎年、証言者が各地を回って証言集会を開いています。東京では今回、上丸さんから「新聞記者の南京攻略戦」ということで話していただきました。

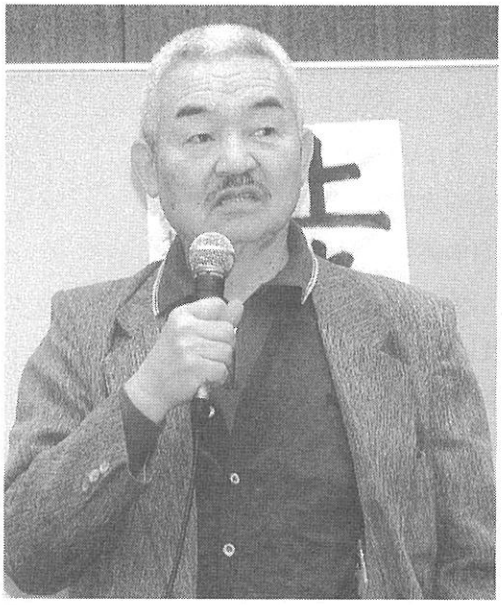
おりしも、田母神問題があります。ああいう人が自衛隊のトップに座っていること、彼の指揮のもとに制服組がいることを考えると、過去とどう向き合うのかという課題は、決して昔のことでない、過去に学ばなければいけないということを改めて感じさせてくれたのではないかと思います。

何度も申し上げてきましたが、「ノーモア南京の会」というネーミング自身にこだわりたいのです。ノーモア・ヒロシマとか、ヒロシマ・ナガサキとカタカナで書ける地名は、戦争の悲惨さを世界に発信する、日本の貴重な地名ですけれど、南京のあとに広島があるということです。南京がなければ広島はなかったとは単純には言えないですが、やはり広島の前に南京があった。南京大虐殺はなかったという人がいるけれども、広島の原爆投下はなかった、作り話だと言う人がいたら、日本の皆さん、どう思いますかと、南京で言われたことがすごく印象に残っています。そこに、ノーモア南京という証言の重みがあると思ってきました。

大日本帝国憲法第１条は、「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇コレヲ統治ス」でした。国家主権は天皇が持っていた。戦争をするのは天皇しか出来ない、国家主権は天皇にあるのですから。明治以降の４回の対外的戦争、日清戦争・日露戦争・第一次大戦・第二次大戦（大東亜戦争）とありました。いずれも天皇の「開戦詔勅」がある。新聞に囲みで載り、御名御璽とあります。そのなかには「国際法を遵守する」というのが必ず書いてあります。「いやしくも国際法にもとらざる限り」、「およそ、国際条規の範囲において」などとあります。ところがそれは、日清戦争、日露戦争、第一次大戦のときで、第二次大戦の時には入っていないのです。

第一次世界大戦のとき、山東省でドイツ兵を捕まえて日本に連れてき、徳島県にある板東捕虜収容所で、いかにドイツ兵の捕虜を大切にしたか、ベートーベンの「第九」が日本で最初に演奏されたのは、東京ではなくて、徳島で演奏されたというのが、藤岡正勝の「教科書が教えない歴史」に必ず出てくる。いかに日本が国際法を守ってきちっとやったかと

いうことが書いてある。松平健が捕虜収容所の所長の役をやった、「バルトの楽園」という映画で評判になった話ですね。



ところが、そのあとの第二次大戦の昭和天皇の「開戦の詔勅」ではそれがない。事柄の性質上、入れ忘れるということはないので、意図的に外したということになる。

日本は、第一次大戦後、戦勝国として、ヴェルサイユ講和会議に参加し、そこでできる国際連盟では常任理事国になっている。

１５年戦争の始期の満州事変以降、上海事変、日華事変といういい方をする。先ほど４つの戦争と言ったけど、何故「事変」という言い方をするのかというと、これは宣戦布告をしないからです。宣戦布告をしないと戦時国際法が適用されない。戦時国際法によると捕虜を保護しなければならないというルールがありますから、宣戦布告をしないのです。

１９３１年の満州事変のあと、「満州国」を作った。そして、国際連盟から満州国のでき方はおかしいじゃないか、よその国の土地に別の国を作ったわけですから、問題になったわけですね。リットン調査団が現地調査をし、リットン報告書が出て、満州からの撤兵勧告がでますが、そのとき日本は、松岡洋右が国際連盟総会の席を蹴って退場する。

リットン調査団が報告書を出した１９３２年の秋、各新聞社が「共同宣言」を出した。「いやしくも、満州国の存立を危うくするが如き解決案は、断じて受諾すべきものに非ざること」と言って、メディアが先導して満州国を擁護する声明を発表したんですね。そこからおかしくなってきています。国際連盟を脱退したわけですから、国際社会のルールは一切無視するようになる。そして、昭和天皇の「開戦の詔勅」になる。そうなってくると、南京大虐殺だろうと、「死の行進」だろうと、泰緬鉄道の「死の鉄道」だろうと不思議はない。国際ルールには従わない、欧米の作ったルールには従わない、そういった大きな構造のなかで歴史を見ることが、ますます必要になってくるんじゃないかと思います。

またよく出てくるのが、日本はアジアの独立に貢献したという話があります。アウンサン・スーチーのお父さんのアウンサン将軍が、日本軍と一緒にビルマの解放のために戦ったという話ですね。アジアの独立に日本の侵略が貢献したと言うのなら、あなたの家が放火犯によって燃えてしまった、それで新たに家を建てる、そのときに放火犯に感謝したいですか、とかつて東南アジアの留学生から言われたことを思い出します。

アジアで日本軍は、はじめ歓呼のなかで迎えられますが、それはなぜかと言うと、例えば、ビルマの青年アウンサンにとっては、「敵（イギリス）の敵（日本）は味方」になる側面がある。インドネシアならオランダの、フィリピンならアメリカの、ベトナムならフランスの、という関係になります。それを当初、歓呼の声で迎えられたところだけを取りだして、アジアの独立に貢献したというんですね。

有名な話ですが、英印軍に対する日本の特務工作で、インド兵を日本側につけようとしました。インドを独立させようと、「自由インド仮政府」をシンガポールに作り、インド国民軍も組織するのですが、その工作を一生懸命やった陸軍中野学校を出た、特務機関長の藤原岩市、戦後自衛隊の幹部になるんですが、この人が書いた文章が面白いんです。「インドの独立を助けて、戦争をやってるって言うけど、それなら何故、今なお朝鮮が日本の支配下にあるのか、何で南京であんな事件を起こすのか、何で台湾をいつまでも中国に戻せないのか、と問われ、説明に困った。」ということを書いています。

全体のなかで物事を考えることがますます重要になってきていると感じています。今日、映画を見ながら、証言を聞きながら、上丸さんの話を聞きながら、難しい状況ですけど、こういう活動、こういう場を作っていくことが、ますます必要になっていると感じています。

南京戦の記者たち／新聞にみる南京戦

上丸（じょうまる）洋一　朝日新聞編集委員

朝日新聞は、２００７年４月から１年間、「新聞と戦争」というタイトルの連載をしました。私は、その取材班の一人として、取材・執筆にあたりました。おかげさまで、新聞労連ジャーナリスト大賞、ＪＣＪ（日本ジャーナリスト会議）大賞、石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞の三つの賞を受けるなど、高く評価していただきました。

連載は『新聞と戦争』（朝日新聞出版、２００８年）という単行本になっています。

●記者たちの思い

この連載でやろうとしたのは、事実を突きとめる、ということです。新聞は戦争に協力した、ということはこれまでもずっと言われてきました。それはその通りなのですが、いつ、どこで、だれが、何をしたのかというファクトは必ずしも明らかにされてこなかった。朝日新聞社の社史は、新聞の戦争責任ということをかなり意識して書かれていますが、それでも十分ではない。だからまず事実を明らかにしなければならない。それが第一の目標でした。

私たちは、原稿をつづるうえで、ファクトで語る、という手法をとりました。言い換えると、戦時下、新聞は何をし、何をしなかったか、そのいわば「起訴事実」を明らかにしようと考えた。自分たちの意見や説明は極力、排除する。そして「判決」は読者の皆さんに下していただく。そういう構えで連載に取り組みました。

もう一つ、私たちが考えたのは、当時の記者たちの思いに迫りたい、ということでした。彼らはどんなことを思って戦時報道にあたったのか。もちろん、戦争取材にあたった記者で、いまも元気でいらっしゃる方はそう多くありません。だから、直接、取材することには限界があります。そこで、新たに資料を発掘するなどして、記者たちの内面に迫りたいと思いました。これはしかし、非常に難しい課題でした。

●地方版を点検

さて、「新聞と戦争」は全部で２３のシリーズからなっており、そのうち私は五つのシリーズを担当しました。「南京」は私が担当したシリーズのうちの一つです。

私は南京戦や日中戦争について、それまで自分でじっくり調べたことはありませんでし

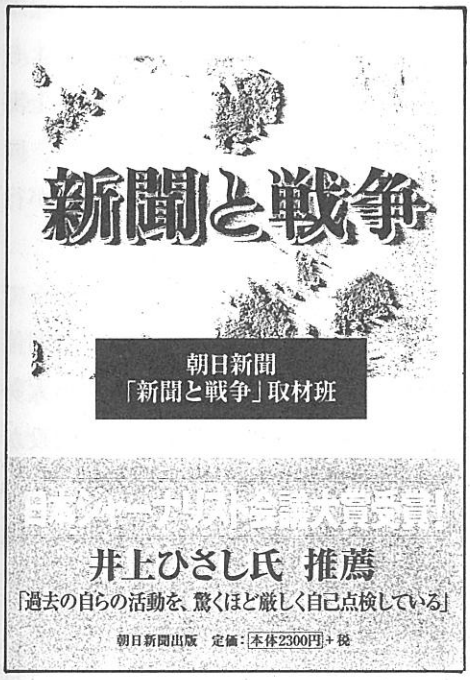
た。といいますか、新聞記者は多くの場合、いつも、いかなるテーマについても概ね素人でありまして、取り組むべきテーマが現れたときに、一からわっと調べる。南京戦も、一般的な本はそれまでも読んでいましたが、詳しい分析や原資料は読んでいませんでした。それで２、３カ月かけて、いろいろな資料を集中的に調べました。

そうしてまずわかったのは、南京戦に際し、新聞記者は何をしていたのかということを調べた著作はほとんどなくて、いわば手つかずの状態である、ということでした。いくつか記者の従軍記や手記のたぐいはあるのですが、それもそう多くない。また、大勢の記者が従軍したにもかかわらず、南京虐殺について記者はほとんど書き残していません。

それでも、将兵が残した日記などの中に、時折、記者の姿が見えてきた。また、当時の新聞を丹念に読み込む中でさまざまなことが浮かび上がってきました。

「南京」シリーズを書くに当たって、１９３７（昭和１２）年１２月の南京戦前後の朝日新聞の地方版、山梨版とか秋田版とか全国の道府県ごとに地方版があります。さらに言うと、例えば愛知県なら三河版と尾張版というように、同じ県内でもいくつかの版がある。それと植民地（朝鮮・台湾）に配られた新聞の地方版をほぼすべて点検しました。

この作業は今まで専門の研究者もあまりやっていなかったようです。ただし、この作業は、新聞社に勤めていても、そう簡単にはできない。というのは、愛知県の地方版は名古屋本社にあり、熊本県の地方版は九州の本社にあり、という具合で、それぞれ出かけて行って見なくてならない。しかもマイクロフィルム化されていますから、見るのに相当手間と時間がかかる。しかし、それを集中して見ることで、はじめて見えたこともあります。



地方版は読者との距離が近い。出征した○○村の○さんについて記事が載るのは多くの場合、地方版です。読者は自分の息子や夫の近況が新聞に出ていないかと思って、食い入るように新聞を読みます。だから新聞社は、地方版にやたら兵士の写真を載せます。読者はそれを見て、息子や夫の無事を確認するわけです。

当時の新聞を点検する作業を通じて、私が着目したのは、そのころの新聞記者がいかなる制約、いかなる条件の下で取材、報道活動にあたっていたかということです。戦場において新聞記者と軍はどういう関係にあったのか。もちろん、検閲があるわけですが、では戦場の事実は何も書けなかったのか。「何も書けなかった」と当時の記者は言うのですが、実際に紙面を読んでみると、断片的な記事ではある

ものの「いや結構、書いているじゃないか」などと思うわけです。ただし、問題は記事にどこまで信頼性があるか、つまりどこまでが事実で、どこからが誇張か、手柄話として書かれているために、判然としない部分があるということです。

敵を何十人も殺したというような記事を、記者は、日本軍兵士の手柄話として、どんどん書く。それが人道にもとるという意識は、記事を見る限り、まったくうかがえない。いや、記者にはそういう意識があったのかもしれないが、そこは記事には書けない。そこは書けないが、何十人も殺したということは書いている。

●カメラマンの死

ここで南京戦に従軍した一人の朝日新聞カメラマンのことをお話しします。

１９３７年７月７日に盧溝橋事件が起きまして、８月に上海に戦火が上がり、激しい戦闘が繰り広げられます。それから日本軍は上海の西、内陸の揚子江岸にある南京に攻め上る。そして１２月１３日に南京を攻略するというのが日中戦争初期の動きです。

その中で朝日新聞のカメラマン浜野嘉夫が死んでいます。死亡したのは３７年１２月８日午後５時４０分、１２月１３日が南京陥落ですから、その５日前ですね。記者６人で移動している中で中国軍の戦車から機関銃掃射を浴びて２６歳で亡くなります。戦争初期の従軍記者の死ですから、浜野の死は非常に丁重に扱われます。

浜野はもともと朝日の名古屋本社のカメラマンでした。遺骨は名古屋本社に戻ってくる。当時の記事から、その後を追ってみます。

１２月８日に亡くなって、９日に名古屋本社に浜野死亡の連絡が入る。夜には名古屋本社に祭壇が設けられて社内追悼式が行われます。１１日には名古屋市中区の少年少女１５０人が礼拝に来たという記事が載っています。それから１７日に同僚の記者が遺骨を上海支局まで持ってくる。翌日には南京で陸海軍の大慰霊祭が行われ、それに合祀される。同じ１８日上海の西本願寺で他の新聞社、読売、福岡日日の戦死者と一緒に合同告別式が行われる。中国においての慰霊の催しはそれで終わります。

その後、遺骨は２０日に門司に着く。そして朝日新聞の九州の本社（西部本社と呼んでいます）の慰霊祭が下関で営まれる。２１日には、遺骨をのせた列車が大阪駅に６分間停車したあと、名古屋に向かったという記事が載る。大阪駅に朝日の社長や取締役らが大勢出迎えて読経が行われる。さらに、大垣駅を通過、一宮駅を通過、一宮駅には市の助役が来ています。それで２１日午後１時に名古屋駅に着きます。

名古屋駅には名古屋の市長や助役が迎える。ライバル社である大阪毎日の名古屋の総局長らをはじめ弔問客が大勢来ます。そこには陸軍大臣の杉山元の花輪だとか、南京戦を指揮した陸軍大将松井石根の花輪もある、知事の花輪もある。

翌２２日に名古屋本社で社葬が営まれ、有力者１０００余人が冥福を祈る。社葬には皇

族の閑院宮参謀総長や首相の近衛文麿から供物が送られてきます。そんなに手厚く扱うのは戦争の初期だけだと思いますが、そのように非常に派手に死者を弔っています。年が明けた３８年４月には社内の有志によって『カメラの戦士　浜野嘉夫』という非売品の本までつくられます。

●記者を見る目

ところが、そんな戦場の記者の死を非常にクールに見ていた人がいることが最近わかった。

東京・人形町に自費出版図書館という図書館があります。その名の通り、自費出版の本ばかり集めた図書館でして、ＮＰＯ法人が運営しています。戦争体験記は自費出版されることが多く、国会図書館にない本が、この自費出版図書館にあることがあります。それでたまに出かけていくのですが、そこで手にした本で、水野敏雄という方が書いた『戦争紀行』という本があります。２００２年に出た本です。

水野さんは１９１９年生まれ。戦争で満州に行った方です。その本に、こう書かれていて、へーっと思って読みました。

「休憩で道路脇に寝そべって休んでいた。疲れてくたくただ。その時連隊本部らしき一団が通過した。乗馬している将校の中に、一人軍属の様な服装をした者がいた。新聞記者だ。入営前、支那事変が始まってから、新聞記者の戦死を、大々的に報道したので、読者の国民が大反撃をした事を思い出した。今、目の前に新聞記者を見て、兵とくらべて、まあなんと楽なのだ。兵・下士官兵どころか、下級将校より、ずっと楽だと思った。新聞記者の戦死と、決死隊の戦死とを、同じ様に報道したのだから、読者から大反撃されるのは、あたりまえだ。新聞記者はいいなと思い、うらやましかった」

これだけしか書かれていないので、新聞記者のどんな振る舞いを見たのか、どういう状況だったのか、これ以上は分かりません。水野さんも言うように、おそらく新聞記者は、最前線の兵に比べたら楽だったでしょう。移動手段は新聞社が手配したバスです。

新聞記者の死が派手に扱われることに対して、なんだ、あいつらという眼差しで見ている人がいた。「読者の国民」が実は「大反撃」していた。そういうことがあったと知って、私は、はっと息をのみました。戦場において記者たちはうらやまれる存在だった。ふつうの兵士にはそう見られていた。そのことを踏まえておきたいと思います。

●本社への手紙

ここに朝日新聞の社内報があります。１９３７年１２月１０日付ですから、日本軍が

まさに南京に攻め上っている時期の社内報です。朝日新聞に勤めている人が応召して戦地に行く。その人が北支戦線から出した手紙が社内報に載ったのです。

見出しに「支那兵を切るのも今は平気です。戦地でも朝日が大もて」とあります。この人は「戦地に行って新聞を見るのが何よりも楽しみであります」とも言っています。

「『朝日』の記事は見事であるとみなそう申しております。その声を聞きますと戦争に勝ったと同様に嬉しくて嬉しくてなりません。何と言っても新聞の生命線であります。支那兵の首を切るのも今は平気の朝飯前になりました。どうか、この点何とぞご安心ください。毎日元気で働いております」

書いたのは本社庶務課の守衛だった人です。その人が、戦地から新聞社に近況報告として、「支那兵を切るのも今は平気」だという手紙をよこした。こういう手紙を社内報に載せる感覚というのは、今ではちょっと理解しがたいのですが、「それが異常ではなかった時代」の、その異常を思います。手紙には「尚、兵隊宛に当方の新聞を調べて見ますと『朝日』が絶対多数であります。大変嬉しくもあります。」ということも書かれています。

●従軍日記から

南京戦に関して私が調べたのは、そこで記者たちは何をしていたのか、ということが第一のポイントでした。「南京戦の記者たち　新聞に見る南京戦」という資料を用意しました。この資料からも分かるように、戦場の新聞記者たちは、一般の将兵によってその姿を目撃されています。腕章をしていたり、あるいは社旗などを持っていたりするから、一目瞭然で記者と分かったからでしょう。

そこで、偕行社という陸軍将校の親睦団体が出している資料集から、新聞記者の姿をピックアップしていきました。この資料集には、南京戦に従軍した将兵の日誌などが収録されています。南京が陥落した１９３７年１２月１３日、１４日あたりの記述を見ると、将兵たちが、南京城内で新聞記者の姿を見かけています。

例えば、牧原信夫日記の１２月１３日の項には次のようにあります。

「(朝) 新聞記者も続々嬉しそうに自動車或は徒歩にて入城す」

また、井家又一日記の１２月１４日の項。

「南京の避難民は此の地区に外人の建物の大建築にあふれて居る。朝日新聞記者の報にて現場にかけつける。約六〇〇名の敗残兵が外人の建物にあふれているのである。南京

落城の為逃場を失ったのである。此の処置を日本大使館に委任す。午後四時迄残敵掃蕩終りて帰る。市街にある自動車を徴発しては日本兵が市内を乗廻している。南京の町は日本軍の完全な者になってしまった。新聞記者があちこちとうろついているのを見る。朝日・毎日・読売と社旗をひるがえして走っている。中山路に朝日南京支局と看板もかかげられている」

朝日新聞の南京支局は国際難民区の中にありました。驚いたのは、１２月１３日に南京を攻略したあと、早くも１６日には内地の新聞が南京に届いていたことです。１６日には最前線で日本の新聞を読んでいた。これは驚きでした。

山崎正男日記の１２月１６日の項に書かれています。

「南京戦場の内地新聞を見る。昨十五日夕上海方面より飛来せる飛行機は、南京飛行場に内地新聞を投下す。十五日付朝刊及夕刊（十四日夕のもの）にして、南京占領を報ずると共に、内地の提灯行列の写真を掲げ、感激の情手に取るが如し。我々の南京占領が斯く迄内地に於て喜ばれあることを見れば、当然とは言へ洵に有難し」

こういう記述です。この頃の夕刊は１日先の日付を載せています。だから１４日夕方に出た夕刊には「１５日」の日付が書かれています。情報と隔絶された戦場と、日本内地の新聞とは、時間的にも物理的にも非常に、たいへん遠いところにあるように思っていました。ところが、従軍記者の書いた記事が新聞に載ると２、３日で戦場に届いて、将兵がそれを読んでいた。自分たちの戦闘がどう書かれたかそう時間をおかずに確認していた。よくやった、頑張った、と書かれていれば、兵士たちはやはりうれしいでしょう。そういうサイクル、循環が、中国の戦場と日本との間で、せいぜい３日か４日の時間の中で成立していたわけです。

もちろん私は、侵略を肯定するつもりは毛頭ありません。そのうえで言うのですが、命がけで戦闘している者とすれば、勝利をたたえる紙面を読めば、励みになるというか、ちゃんと内地の人々は見ていてくれると確認できる。そういうことがあったでしょう。しかも紙面には勝った勝ったのバンザイ記事、軍国美談しか出てこないわけですから。そういう記事を読み、そういう記事に鼓舞されながら戦争をやっていたわけです。

これは南京戦だけの例外的な事実ではなくて、色々な場所でそういうことがあったんだろうと思います。これには、へえ、そうだったのか、と非常に意外な感じがしました。

新聞は内地（銃後）にいる人々を戦争に動員し、鼓舞するためにあっただけでなく、戦場の兵士たちもそれに励まされていたわけです。

同じ１２月１６日の井家又一の日記に、かなり凄惨な光景が描かれています。

「午前拾時から残敵掃蕩に出ける。……若い奴を三百三十五名を捕えて来る。避難民の中から敗残兵らしき奴を皆連れ来るのである。全く此の中には家族も居るであろうに。……只々泣くので困る。手にすがる、体にすがる全く困った。新聞記者が此を記事にせんとして自動車から下りて来るのに日本の大人と想ってから十重二（十）重にまき来る支那人の為、流石の新聞記者もつひに逃げ去る。はしる自動車にすがり引づられて行く。本日新聞記者に自分は支那売店に立っている時、一葉を取って行く。……揚子江付近に此の敗残兵三百三十五名を連れて他の兵が射殺に行った」

避難民に取り囲まれて、記者は逃げ去ったというのです。何十年後かの後輩として、何をしているのだ、この記者たちは。逃げ去ってどうする、という気がしますが、これも貴重な記録だと思います。

それから１２月１９日の泰山弘道の日記に次の記述があります。

「大谷法主一行、並に従軍新聞記者十数名、之に入場式に参列せる海軍軍楽隊を加え、数十名の便乗者が此の掃海艇にて江を下ることとなる。……新聞記者団一行は、土に泥れたる従軍服のまま士官室の小さきストーブを囲みて折り重り、或は眠り、或は戦況を語るあり。……午前九時抜錨、江を下る。聞くならく、最後迄南京を守りし支那兵は、その数約十万にして、その中約八万人は勦滅せられ、江を渡り浦口より逃げ延びたる者約二万人あり。下関に追い詰められ、武器を捨てて身一つとなり、筏に乗りて逃げんとする敵を、第十一戦隊の砲艦により撃滅したるものも約一万に達せりと云ふ」

「新聞記者十数名」は泰山によって確実に目撃されています。その記者たちは、日本軍が中国兵を大量に殺害していることを聞いていた。聞いてはいても、その現場に行ってみようとした記者がいたかどうか。いなかったのではないか。なぜなら、それが戦争であり、戦争で「敵」を何万人殺そうが、いちいち驚くようなことではなかった。当時の記者の心境はそんなところではなかったでしょうか。

この日記にあるように、１２月１９日になると、南京から上海へ引き上げていく記者が出てきます。この間、記者たちはまちがいなく南京城内のようすを見ているはずです。

●記事に見る南京戦

今度は新聞記事です。１２月２１日付朝日新聞広島版に「勇猛山田隊の名」という見出しの記事が載ります。

「進撃が余りに急なため糧食の補給は出来ず杭州湾上陸後ずつと現地物資で間にあはせた」「松江、湖州、広徳など何れも敵の大軍を撃滅その都度千人、二千人の捕虜と多量の武器をろ獲……」「昇山市の戦闘で敵の遺棄死体千六、七百がクリークと本道の堤防上に二里余もずらりと並び、クリークの中にも三百余の敵死体が浮いてゐた」

このように、戦場の凄惨な光景も記者たちは書いていました。１２月２３日の福井版には次の記述があります。

「(各隊とも)連日城内の殲滅掃討に馳けまはつてゐる、何分南京城内外の防衛に参加した敵十万のうち半分までは便服に着かへて市中にもぐり込んだといふだけあつて残敵はうようよしてゐる」「『戦線で頑敵と対峙してゐる方が気分が楽だ』など冗談らしくいひ合つてゐるが冗談でなくこれが本当の声だ」「(朝日新聞の) 支局は伊佐部隊掃討地区の中心にある……」

ちなみに、これを書いた記者は、別に福井版専門の記者ではない。記者は、どこの部隊であれ、とにかく目についた光景を原稿にして送る。原稿を受け取った東京本社、あるいは大阪本社が、原稿に登場する部隊の名前などをみて、関係する各県版に振り分けたのだと思います。

さて、福井版の記事に戻りますと、南京城内外の防衛に参加した敵１０万のうち、半分までは便衣（軍服ではない服＝平服）に着替えていた。当時、中国戦線に従軍した作家の火野葦平だったと思いますが、動いている敵は殺せる、捕まえてしまった敵は殺せない、とどこかに書いていたことを思い起こします。火野が言っていることは本当にそうなんだろうと思います。動いている敵は敵として狙い撃ちできるけれども、それぞれに名前を持つ人間が目の前に立っている時は、なかなか殺せるものではない。

この記事に、戦線で敵と対峙している方が気分が楽だとあるのはそういうことだと思います。残敵掃討で無抵抗の兵を撃つのは気が滅入る、楽ではないと、そういうことを兵隊たち言っているという記事です。

次に１９３８年１月８日付の朝日福岡版の記事。「チャンコロ」という中国人に対する侮蔑語がそのまま記事に出てきます。

「チヤンコロは射撃なかんづく狙撃はなかなか侮り難くむしろ日本兵以上かとも思はれるが、しかし彼らが日本刀を恐るることはこれまた非常なもので、●（一字不明）して近寄つて来ずこの点は憐れなくらゐだ、日本刀の斬味はいまさらながら感嘆のほかなく、

コロリと首の落ちるときの有様は実に無造作なものだ」

南京攻略戦における「百人斬り」をめぐって訴訟が起きましたが、中国人の首を斬るのはむしろ日常的な光景だったことが分かります。このように、当時の新聞を丹念に読むと、戦場の実相はそれなりに書かれていました。

今度は３８年１月１４日付の「北海樺太版」です。本社札幌通信局員、荒木勝蔵少尉手記とあります。この人は朝日の札幌通信局の新聞記者ですが、その時は陸軍少尉として南京にいたわけです。

「入城の十三日夜と、翌日午前と矢つぎ早に、残敵掃討をやつた、私の部隊の掃討区域は日本大使館や本社（朝日新聞）南京通信局を中心とする外国公館の多い地域で、避難民と敗残兵とゴッチャになつた区域であつた。十四日午前の残敵狩りを終へて無人の日本大使館前庭で昼食を喫し、夕刻宿営地に帰つたが、部下の清水一等兵が手に綺麗に咲いた黄菊数輪を持つてゐるのを見た。……」

南京入城の１２月１３日夜と翌日午前に残敵掃討をやったと書いています。これ以上は書けなかったのかもしれません。ただ、「残敵掃討」をやったことそれ自体はここに示されています。１月１４日付福島版には「敵の死体を憐れむ」という記事が載っています。

「南京に入城致しました。入城して特に目につくものは数万の敵兵の死体がそのままになつて居る事で実に可哀さうです、南京十四日の攻撃一番乗りは我が山田部隊の城門爆破である事は新聞で御覧の事と思ひます……」

城内に数万の敵兵の死体があった、と言っているわけです。南京虐殺否定論者は、当時の新聞を見ても、何も書かれていない、と言いますが、何も書かれていないどころか、こういう記事はたくさんあります。

さらに、１９３８年1月２５日付の長崎版の記事。「盥（たらい）で、戸板で、敗走の敵哀れ揚子江の藻屑に　月野木部隊徳丸准尉」という見出しです。「同盟上海電」とありますので、当時の国策通信社である同盟通信が上海から送った原稿です。南京市街の背後に揚子江があります。揚子江を越えて向こう岸に逃げようとする中国兵を日本軍が撃つ。戦意のない相手を虐殺するわけです。その光景が書かれています。

「戸板や筏に乗つてゐる敵は我々の船に乗込もうとして後から後から縋りついて来る

ので片ツ端から叩き落すとピストルや鉄砲を撃つて来ます……明くれば南京陥落の十三日、敵の数は殖える一方……船の蔽ひの穴から覗いて見ると敗残兵はいづれも寒さに震へながら一生懸命に漕いでゐる、その大部分は鉄砲を捨てたらしく持つてゐない、中には盥に乗つて手でじやぶじやぶ漕いでゐる滑稽なもの、船が沈んで中州に這ひ上り傍を通る船に乗らうとわめいてゐるものもある……同夜十一時ごろ一時支那兵がゐなくなつてほつとしたが、ほんの僅かでまた大群にぶつかつた……翌十四日午前二時半下から軍艦が遡つて来た、日本の軍艦です万歳だ、ところが軍艦は機銃、小銃に猛烈に敗残兵を打ちながら来るので、我々はその敗残兵の中にゐるのでその危険といつたらありません、周囲の敵は銃火を浴びると皆ザブンザブンと冷たい河中に飛び込む」

揚子江上の大勢の敗残兵を撃ち殺している光景がここにあります。「我々はその敗残兵の中にゐるので……」と書かれています。つまりこの記事を書いた記者は川を上流から下ってきている。そこへ、ちょうど、この現場に当たった、偶然そこに出くわした。

こういう記事は枚挙に暇がない。一種の手柄話としてこういう記事が書かれている。だから、検閲があったから戦場のようすは何も伝えることができなかった、という言い方は事実ではありません。

●遺棄死体数千

倉田百三という作家は次の短歌を作っています。

「遺棄死体幾千といふにおどろかぬ人の心を恐ろしと言はむ」

この人は昭和１８年に亡くなっているので戦中に作ったことは間違いない。しかし、発表したかどうかはわからない。土岐善麿という歌人も同じような短歌を作っています。朝日新聞の学芸部長などを務めた人物です。土岐が１９４０年に出した『六月』という歌集に次の作品が収録されています。

「遺棄死体数百といひ数千といふいのちをふたつもちしものなし」

「遺棄死体数千……」というような新聞記事を、土岐のように、現実のこととして、想像力をはたらかせて読んだ人は、その当時、たいへん少なかっただろうと思います。倉田が言うように、そんな記事を読んでもだれも驚かなかった。死体のそれぞれが名前を持つ個人であることを想像することができなかった。「敵」という集合名詞でしか認識していなかった。

●記者心得

記者たちはどのような状況に置かれていたのか。

新聞記者は軍との間でどういう約束をして従軍しているか、その点をまず、見ておきましょう。

「陸軍従軍新聞記者心得」という文書の一部をお示しします。

第十条　従軍者は従軍中総て高等司令部の命令に服従し其の定むる所の規定を遵守すべし

第十一条　従軍者の通信書（通信文私信電信等を総称す）は高等司令部に於て指示せる将校の検閲を経たる後にあらざれば発送することを得ず（後略）

第十二条　従軍者には軍衙軍隊に於て事情の許す限り相当の待遇と便宜を与へ且戦地に在りては実際の必要に依り糧食等を官給し其の他本人の請願に依り舟車の便乗を許可することあるべし

第十三条　従軍者にして刑法軍機保護法等の犯罪あるときは陸軍治罪法の規定に従ひ軍法会議に於て処分することあるべし

これは日露戦争の時に作られたもので、日中戦争でもそのまま使われました。

第十条に「従軍中は総て高等司令部の命令に服従し……」とあります。ここにあるのは、命令を出す者と、命令に服従するものとの関係です。記者は軍隊の外にいない。軍隊の動きを外から観察し客観的に報道するという関係にはない。軍隊の命令を聞かなければいけない。もちろん原稿は検閲を受けます。

第十二条を見ると、言うことを聞く者には飯を提供しないではない、相当な便宜を与えないでもない、という約束になっている。飯はやる、食い物はやる、願いがあれば車や舟に乗せないこともない、ということが書かれています。「許可することあるべし」、つまり、許可することもあり得る、という言い方です。生殺与奪の権は軍にあるということです。義務を課す代わりに、食べ物をあげないでもないよ。そんな感じでしょうか。軍と記者は、そういう関係の中にあったわけです。

本当は、軍は記者たちに報道してもらわなければ困る。勝っても負けても勝ち戦として、何が起ころうが勝ち戦として報道してもらう。そのように働いてくれないと困るわけです。にもかかわらず、付いて来るのはよろしい、ただし、こっちは命令する者で、お前らは命令を聞く者、そういう関係になっている。

今日、例えばイラク戦争の従軍記者は、軍とどういう関係にあるか。自衛隊でも、アメリカ軍でも、軍と記者はどういう関係にあるか。この「記者心得」まで露骨に命令・被命

令の関係にはなっていないと思います。しかし、戦況情報をもらうには、支配、被支配とまでは言いませんが、言うことを聞いてくれ、聞いてくれる分には情報を出す、といったことがあるのではないでしょうか。そういう軍と記者との関係は、今日も必ずしもきれいに説明がつく対等な関係になっているとは思えない。つまり、日中戦争の「記者心得」と同じではないにせよ、今日の従軍取材もある程度そういう要素を含んでいるのだろうと思います。

●新聞検閲

それから記者が書いてはいけないものについても指示があります。日中戦争が始まった直後の１９３７年９月に陸軍省報道検閲係が出した「新聞掲載事項判定要領」です。一部を紹介します。

左に列記するものは掲載を許可せず

（１２）我軍に不利なる記事写真

（１３）支那兵又は支那人逮捕訊問の記事写真中虐待の感を与ふる虞（おそれ）あるもの

（１４）惨虐なる写真但し支那兵又は支那人の惨虐性に関する記事は差支へなし

注意　従軍者は拳銃の外一切武器を携帯するを許さず

まず「わが軍に不利になる記事写真」はダメだと言っています。これ一つですべて済みます。わが軍に不利になる記事写真はダメ。さきほどから紹介している何百人、何千人もの敵を殺したといった記事については「わが軍に不利になる」と思っていないわけです。

次に「支那兵又は支那人逮捕尋問の記事中虐待の感を与ふる虞あるもの」これもダメだ。暗黙のうちに、というか、逆説的に、いかに中国人を虐待したか、よく分かります。

一方で「惨虐なる写真但し支那兵又は支那人の惨虐性に関する記事は差し支え無し」と言っている。日本軍が残虐なことをしている写真はダメで、中国側が残虐なのはいいということです。そういう規定があります。

それから３７年８月に憲兵司令部が各憲兵隊に対して「時局に関する言論、文書取締に関する件」という通達を出しています。禁止事項としてあげているのは「皇軍の名誉威信を損じ又は軍紀の厳正を疑はしむるが如き事項」。こういう記事は書かせるなといっています。もう一つ面白いのは次の個所です。

「国境を超越する人類愛又は生命尊重、肉親愛等を基調として現実を軽蔑する如く強調又は風刺し為に犠牲方向の清新を動揺減退せしむる虞ある事項」

人類愛だとか生命尊重、肉親愛、そういう感情をかき立てるようなものは書いてはいけないというわけです。それでも、そういう記事が全くなかったかというと、断片的にはあります。３８年１月１８日付の朝日新聞新潟版に載った「陣中座談会」に、こんなくだりがあります。

「正規兵の精兵といふのを見るとみんな十六、七歳から二十二、三歳位の若いものばかりで、……敵ながら天晴れな戦争をやるが、土民や年寄りは……どうも日本軍を敵軍と考へてゐないやうだ。黒い布にでも何でも『日の丸』さへ書いて居れば安全と思つてゐるんだらう、汚い布切れに『日の丸』描いて稲刈してゐる、こんなのと子供だけは憎めないよ」

記者は意識していないのかもしれませんが、中国の人々の表情がうかがえる記事です。「子供だけは憎めないよ」と書いた記者は、おそらく、そう書きながら日本の家族を思い起こしていたのではないでしょうか。

●記者の仕事は軍の後援

さて、南京攻略戦で、記者と軍はどういう関係にあったか。中支那方面軍司令官として南京戦を指揮した松井石根の日記の３７年１０月９日の項に次の記述があります。

「此午後邦人記者十数名を軍司令部に召致し初回の会見をなし尚左の要旨の談をなす」「各新聞通信員一同能く予の意を諒し　緊張せる態度を以て其通信の任務に努力し　軍の行動を後援すへき決意を述へて退散せり　又上海各新聞社及同盟、朝日、毎日の代表者は各新聞記者を代表し　予及将兵に対し感謝の辞を呈し一同撮影の後帰還せり」

記者たちは「軍の行動を支えます」と決意を述べ、朝日などの代表者が松井と将兵に「感謝の辞」を述べて記念撮影をした。軍の行動を側面支援するのが新聞社、という認識です。本来なら、記者は、軍の行動の客観的観察者であるべきなのでしょうが、当時の記者たちは、戦場での日本軍の奮闘ぶりを日本に伝えるべく頑張りますと誓っています。

記者たちはそういう思いで従軍した。そんな記者たちに、日本軍の非道な行為を書くという発想があったかどうか。元々なかったのではないかと思います。

戦後になっても、南京を見た記者で、その経験を書き残した人はあまり多くない。彼らにとって日本の将兵は「対象」ではなく、仲間だった。仲間の悪事をばらすことへの抵抗があるのではなかろうかと私は思います。

つまり軍と新聞は、持ち場は違うけれどもいっしょに戦争をやっているわけです。軍の行動を外から見ることをしなかった。それが当時のジャーナリズムの限界です。だから、検閲があるから書けなかった、書けないから書かなかったというより、そもそも記者たちに書く構えがなかった。

●国家の外に立つ

権力監視を使命とするジャーナリズムは本来、国家や権力の外に立たなければならない。在野でなければならない。ジャーナリズムのＡＢＣです。

しかし、それはたぶん、今日においても「言うは易く行なうは難し」ではないかと思います。例えば、スポーツの報道はサッカーでも何でも、ナショナルチームが対戦すれば基本的に「ニッポン頑張れ！」の立場でしょう。対戦相手の選手やチームを励ましたり、その健闘をたたえたり、という記事はほとんど載りません。新聞はまだしも、テレビはそれこそ「ニッポン頑張れ！」一辺倒でしょう。まあ、スポーツ報道だから罪がないといえば罪がない。

それが戦争となったらどうか。戦時に国家の外に立って、この戦争はやるべきじゃないとか、早くやめろとか言うのはおそらく、仮に今日、戦争が起きたとしても、非常な困難を伴うだろうと想像します。ジャーナリズムは国家の枠を超えられるのか。国対国の争いとなったとき、自国の外に立って、自国に対し、言うべきことを言う。それが本来のありようですが、では現実に、そういう位置に立てるのか。

本来、新聞は国家の外に立たなければならないのだけれども、戦争となれば新聞に対し「お前ら日本人だろう、日本人の軍隊が命をかけて戦っているのに、何だ！　足をひっぱるのか。頑張れ、頑張れと応援するのが当たり前だろう！」というような、非常に素朴でシンプルな、しかしものすごく強靭な、あらがいがたい力が働くだろうと思います。戦争に反対するのは愛国者ではない、という非難に耐えて、戦争に反対し続けることができるかどうか。世の中が怒濤のように戦争になだれ込んでいくときに、マスメディアが、あえて少数意見に立てるかどうか。問われるのはそこです。

話があちこち行って申し訳ありませんが、１９３１年９月１８日に始まった満州事変で朝日新聞は論調を変えます。それまでは軍縮の朝日、普通選挙の朝日と言われて、政府批判を大いにやってきたのに、満州事変が始まると軍の応援団になってしまう。当初は、不拡大を主張します。ところが、しばらくすると、行け行けドンドンになってしまう。どういう理屈でそういうふうに変わったかというと、こういうことです。

満州事変が起きてから１カ月ほどたった１０月１２日、大阪で朝日新聞の役員会が開かれます。そこでこういうことを決めます。

「国家重大事に処し日本国民として軍部を支持し国論の統一を図るは当然のことにして現在の軍部及び軍事行動に対しては絶対非難批判を下さず極力此れを支持すべき事を決定した」

日本国民として軍部を支持するのが当然のことだというのです。戦争支持は「国民の義務」だという理屈です。軍部の行動は絶対非難しない、極力支持する、そういうことを役員会で決めています。何しろ国家の重大事だ、国家の重大事だから日本国民として軍部を支持するしかない、国家の重大事だからノーと言ってはいけない。

戦争の興奮の渦中にあってそれに同調しない立場をとる、言論弾圧の手段がいくらでもある明治憲法下、国家に同調しない立場をとることは、恐らく非常に厳しく難しかったと思います。そうして朝日は、丸ごと国家に同調していきました。

では、今日だったら簡単に国家の外に立てるのか、というと、どうもそうではなさそうです。戦争という事態、想像もしたくないですが、例えば隣国から日本にミサイルが撃ち込まれたとしましょう。そのとき、私は、反撃しないという選択肢を取っておかないといけないと思う。攻撃を受けたら自動的に反撃しなければならない、というものではない。国家対国家、敵対味方の二項対立の外に立ちたいと私は思うわけです。それは全く不可能なことだとは思わない、しかし、簡単にできることでもない。

●石原莞爾の言葉

満州事変の首謀者の一人に石原莞爾という軍人がいます。非常に多面的な人物で、毀誉褒貶、大きく分かれる人物です。１９４３（昭和１８）年、すでに陸軍の現役を引いていた石原は、郷里である山形県の鶴岡にいました。その石原のもとを訪ねた記者がいます。朝日の出版局編集部員、所武雄という人物です。所の『狂った時代』（１９５５年）という著書に出てきます。所は訪ねた時期を４３年２月としていますが、鶴岡市郷土資料館所蔵の石原の卓上日記を見たところ、４３年１２月１６日のページに「朝日　所武雄」の文字が書き込まれていました。

所は「朝七時に来い」と人を介して石原から指示されます。憲兵の監視を避けるためです。そして二人は次のような会話を交わします。

「この戦争はだね、このまま行ったら必ず負ける。止めるならまず今のうちだよ。どうだね。朝日新聞は全面を埋めて戦争反対をやらんかね。このままだったら今の村山（長挙）社長は一村山社長にすぎないね。全面をつぶして戦争反対をやってみろ、歴史上の村山になるよ。そう、おれが言ったと伝えてくれよ」

「そんなことをしたら、朝日新聞は潰されてしまいますよ」

「なあに、そら潰されるさ、潰されたって、戦争が終ってみろ。いずれ敗け戦ささ。朝日新聞はまた復活するよ。従業員は帰って来る。堂々とした朝日新聞になる。どうだ。そう伝えて欲しいな」

卓見だと思います。当時、朝日の取るべき選択肢は、石原が言うように、一度筆を折ったうえで戦後を期すことではなかったか、と思います。書かねばならないことを書けないのなら、新聞社は解散するしかなかった。つまり、国家の外に立てないなら、ジャーナリズムはジャーナリズムであることをやめるしかない。

ただし、会社をつぶすのも簡単ではない。企業ですから従業員にメシを食わせなくてはならない。家族もいる。それを路頭に迷わせるのですから、簡単なことではない。簡単ではないけれど、石原莞爾が言うのは正論だったと思うのです。

確かに１９４３年、４４年となると、日本の負けは見通せた。４４年の暮れから東京への空襲が激しくなります。空から爆弾が降ってくれば、だれが見ても負け戦に決まっています。その時に朝日新聞が、いや何新聞でもいいのですが、新聞が、当時の理屈にそって言うなら、「国体を護持のため終戦の道を開け」と書いて、それが終戦につながっていったなら、内外の戦争犠牲者ははるかに少なくてすんだはずです。そういう主張をして、つぶすならつぶせ、と言うべきだった。これは一つの空想ですから、現実にどうかといえば、もちろん難しいには決まっています。難しいけれども、人々を救う道はそれしかなかった。

石原のような発想をする人物は例外的な人物だったでしょう。しかし、だれ一人として、そういう発想をしなかったわけではなかった。たった一人にせよ、石原がそう考えた。それが新聞人でなく、満州事変の張本人である石原だったことに歴史の皮肉を感じます。いずれにせよ、本来、新聞人が考えるべきことを石原が考えた。石原は国家を国家の外から見ていた。だからそういう発想ができたのです。

●ベトナム戦争

戦時において国家の外に立つことが難しいということの傍証をもう一つお示しします。ベトナム戦争はしばしば、メディアが終結をもたらした、といわれます。ベトナム戦争では、戦争の悲惨を伝える報道活動が反戦の世論を高めました。そのことは確かに事実としてあると思います。

ところが、ジャーナリズム研究者の石沢靖治という方の著書『戦争とマスメディア』にこう書かれています。

「ケネディ政権が軍事顧問団派遣を決めた際には、インドシナの共産化を止めるためのものだとして、新聞の社説は総じてその政策を支持していた。その後も、マスメディア

はかなりの期間、政権の戦争行為を支持していたのである」

「テト攻勢の４カ月前の６７年１０月になると、ギャラップが１９６５年８月にベトナム戦争についての調査を始めて以来、初めて『戦争は誤りである』という回答（４６％）が『戦争は誤りではない』（４４％）という回答を上回るようになる。それ以降『誤り』であるという回答は増え続け６９年１０月には５８％に達する」

「それまで戦争支持を明確にしていたタイムは、ベトナム戦争に対する編集方針を転換して、この年の１０月６日号の特集記事で、知識者層や若者たちや一部ビジネスマンや政治家の間で、戦争反対の声が高まるという状況を紹介したが、これは世論調査の結果が反戦に転じた時期と軌を一にしている。一方、その他のマスメディアの報道が、戦争に疑問を呈する方向に大きく転換することになったのは、６８年１月末のテト攻勢以降である」

「ベトナムは戦争報道において米マスメディアの報道がアメリカの世論を主導したのではなく、（メディアが）世論の変化に追随したと考える方が妥当」

つまり、アメリカのマスメディアの論調がベトナム戦争は間違っていると言い出したのは、世論調査の結果、この戦争は誤りだという意見が多数派になって以降だというわけです。反戦が少数派の時には、メディアはベトナム戦争反対とは言わなかった。反戦世論が多数派になったあと、メディアはそれに追随した、というのです。

言い換えれば、マスメディアは、少数世論を代弁しない。そういう性質というか、限界をもっているのだろうと思います。反戦が多数派になれば反戦を主張するけれど、そうでなければ国家の方針をそのまま支持する。言論統制などないにもかかわらず、国家が戦争を進める以上、国家に協力するのが国民の義務である。そう考える。言論統制がなくても、そう考える。

●「国民の義務」というくびき

こういう「国民の義務」論は、すごく強い磁力をもっている。英文学者の中野好夫は戦後、「怒りの花束」というエッセーのなかでこう書いています。

「私自身の如きも一度として聖戦などとは思ってこともない、書いたこともない。また勝つともあまり思えなかった。といって、私は決して傍観して日本の負けるのをニヤニヤ待ち望んでいたわけでは決してない。十二月八日以後は一国民の義務としての限りは戦争に協力しました。欺されたのではない。進んでしたのであります」

中野は自分が「戦争協力」したことを率直に認め、反省するわけですが、その際、このように「一国民の義務として」「進んでした」と言っているのです。同じエッセーのなかで

中野は、当時の新聞記者を批判しています。それも紹介しておきます。

「報道班員などと称する連中の文章は最も不愉快であった。彼らこそ個人的、私的に接すると、不平、厭戦タラタラの癖に（繰返していうが、私はいまこれを責めようというのではない）、一旦記事の文章となると、ほとんど無良心かと思えるような見事な御用記事を書く」

内心、不平タラタラなのに、「国民の義務」をかたって筆を弄ぶ。そんな記者も実際にいたでしょう。新聞だけでなく、当時の日本人の大半は、「国民の義務」として戦争に参画した、参画せざるを得なかった。だから仕方なかった。そういう論理です。

日本の新聞なのだから、戦争となれば「日本頑張れ」と言うのは当然だ、という論理に立つなら、新聞は「次の戦争」に際して、かつてと同じ過ちをおかすことになるでしょう。つまり伝えるべき事実を伝えず、戦意高揚をはかるための道具と化すのです。「国民の義務」を尽くし、愛国者と認められるのと引き替えに、ジャーナリズムとしての存在理由を失う。

この「国民の義務」という論理は、日本国憲法下の今日においても、にわかに否定できない何かがあります。では、同じ過ちをおかさないためにはどうすればいいのでしょうか。

●国家への忠誠を超える

２００８年１２月に亡くなった評論家の加藤周一の文章で、是非紹介したいものがあります。『戦後日本　占領と戦後改革第５巻　過去の清算』所収の「序論」の一節です。

「多くの知識人は、日本型『ファシズム』の体制に批判的であったが、始めた戦争には勝たなければならない、したがって戦争努力には協力しなければならない、と考えた。この考えには二つの弱点がある。その一つは、戦争の本質に関する理解の誤りである。帝国主義的膨張政策は過ちであり、侵略戦争は過ちである。過った行為は、その主体が国家であろうと個人であろうと、始めた以上貫徹すべきものではなく、一日も早く改めるべきものである。

もう一つは、戦争の現実に関する判断の誤りである。中国の人民の抵抗に日本軍が勝つ可能性はなく、米国の軍事力に勝つ可能性も全くなかったことは、当時すでに明らかであった。勝つ可能性のない戦いに『勝たねばならない』と言うのは、意味をなさない」

「国民の義務」論は、日本軍によって殺され、陵辱された中国の民衆、アジアの民衆にとっていかなる意味をもつのか。問題の核心はここにあります。加藤さんはまた『「戦争と

知識人」を読む』という本のなかでこう述べています。「国家に対する忠誠概念を超えて国家の善悪を判断する規準」をもたねばならない、と。

戦時下、加藤の言う「国家を超えて国家の善悪を判断する規準」をもつ人々は徹底的に弾圧されました。国家の外に立つことは許されなかった。例えば、天皇とキリストとどっちが偉いかと問われる。キリストと答えれば、国家の外に立つことになる。だから、キリストもまた、天皇のもとにあると答えねばならなかった。

同じように、新聞もまた、国家の外に立つことが許されませんでした。国家の外に立てば、「非国民」と呼ばれました。新聞は「非国民」として立ち続けることができませんでした。国民であろうとして、戦争に協力した。戦争を煽った。

ジャーナリズムは残念ながら戦争中、「国家に対する忠誠概念を超えて国家の善悪を判断する規準」を持っていなかった。国家に向かって、これはダメだ、やってはいけないと異議申し立てをする「規準」を持っていなかった。あるいは、持っていたけれど言えなかった。そういう面も確かにあったでしょう。だとしたら、石原莞爾が言うように、新聞社をつぶすという選択肢もあったのではないか。

加藤の言う「国家に対する忠誠概念」を、中野好夫はこういう言葉を使って表現しています。「祖国日本というものへの超理性的な心情」。確かにありますよね、「祖国日本」への超理性的な心情。それを超えて、その外に立つ。この批判精神はジャーナリズムだけのものではない。市民の批判精神というか。国家の進む道について、国家の論理に巻き込まれるのではなく、国家の外に立って観察し、評価し、批判する。それは、ジャーナリズムだけでなくて、市民のありようでもあると思います。

加藤はこういうことも述べています。

「止められようが、止められまいが、ほかの日本人の九九パーセントが賛成だろうが、反対だろうが、とにかく悪いものは悪い。『生命線』だろうと『赤化防衛』だろうと、どういう理由をつけようと、中国の子どもを殺すことは悪い」

ジャーナリズムは、そう考えるところに立たないといけない。戦時下、「国民の義務」に抗うことは極めて困難でした。しかし、ジャーナリズムは、たとえ愛国心を疑われ、「非国民」と非難されたとしても、「国民の義務」の論理を超えて、ジャーナリズムに固有の義務を果たすべきだった。つまり、事実を伝えるという義務を果たさねばならなかった。「国家を超えて国家の善悪を判断する規準」をもって侵略を批判しなければならなかった。

●矢内原忠雄の位置

南京虐殺を否定する人たち、日本の侵略を否定する人たちは、「国家の外に立つ者」を「反日」と呼びます。彼らはよく「反日・朝日」という言葉を使いますが、彼らは国家の外に立つ者が嫌いなのです。国家の内にいないという、そのこと自体が気に入らないのでしょう。「反日」というレッテルをはりつけて物を言えなくさせようとしている。

しかし、国家の外に立つのは「反日」ではない。逆にジャーナリズムは外に立たなければジャーナリズムたりえない。国家を対象化しなければジャーナリズムの役割ははたせない。

話が南京戦から離れているように見えるかもしれませんが、私としては南京戦のことを話しているつもりです。つまり個別には、戦争に批判的な眼差しを持っていた記者はいたと思います。しかし、隠れてしまう。

例えば、当時の朝日新聞南京通信局長で、戦後政界に転じ、ロッキード事件で捕まる橋本登美三郎という人物がいます。彼は戦後、そういう虐殺のようなものは見ていないと言っています。いくら現場近くにいても、批判力を持たない人には見えないわけです。「われらが同胞」である日本軍の行いを批判する言葉を持っていない。ただ、そういう言葉を持つことは、今日なお、そう簡単なことではないという自覚を持ちたい。そう思うのです。

日中戦争が始まった直後、東京帝大教授だった矢内原忠雄は「国家の理想」という文章を中央公論３７年１１月号に書きます。その論文は、検閲で全面削除されたうえ、それがもとで矢内原は東大を追われます。「国家の理想」には、こう書かれています。

「真の愛国は現実政策に対する付和雷同的一致に存するのではない。却つて付和雷同に抗しつつ国家の理想に基いて現実を批判する預言者こそ、国家千年の政策を指導する愛国者であるのだ」

矢内原はキリスト者です。戦争のさなかに、矢内原は中央公論にこういうことを書いたのです。つまり彼は、国家の外に立つと弾圧される時代にあって、臆することなく、国家の外に立っていた。しかもそうして「付和雷同に抗し」て「現実を批判」する者こそが「愛国者」だと言っていたのです。勇気ある発言です。残念ながら、当時の新聞人で、こういう発言をした人はいませんでした。

言論の自由が保障された今日、国家の外に立とうとする者に「反日」と罵声を浴びせる人々が、一方で「南京虐殺はなかった」と言っている。つまり国家は正しい、国家のやることはすべて正しい、と言う人が、沖縄の集団自決についても、軍の命令ではなかったと言っている。それが今日の言論状況です。

そうした状況だからこそ、なおさらジャーナリズムは、国家の外に立ち続けなければな

らない。戦時ジャーナリズムの姿を追ってきて、私はそう考えます。

（２００９年３月１４日、ノーモア南京の会・公開学習会での講演）